

■ Missa brevis

Kyrie

Kyrie, eleison
Christe, eleison
Kyrie, eleison

Credo

Credo in unum Deum
Patrem omnipotentem, factorem caeli et terrae,
visibilium omnium et invisibilium.
Et in unum Dominum Jesum Christum,
Filium Dei unigenitum.
Et ex Patre natum ante omnia saecula.
Deum de Deo, lumen de lumine.
Deum verum de Deo vero.
Genitum, non factum, consubstantialem Patris,
per quem omnia facta sunt.
Qui propter nos homines et propter nostram
salutem descendit de caelis.
Et incarnatus est de Spiritu Sancto ex Maria Virgine,
et homo factus est.
Crucifixus etiam pro nobis, sub Pontio pilato passus,
et sepultus est.
Et resurrexit tertia die, secundum scripturas.
Et ascendit in caelum, sedet ad dexteram Patris.
Et iterum venturus est. cum gloria Judicare vivos,
et mortuos, cujus regni non erit finis.
Et in Spiritum Sanctum, Dominum,
et vivificantem.
qui ex Patre Filioque procedit.
Qui cum Patre et Filio simul adoratur,
et conglorificatur, qui locutus est per prophetas.
Et unam, sanctam,
catholicam, et apostolicam ecclesiam.
Confiteor unum baptisma
in remissionem peccatorum.
Et exspecto resurrectionem mortuorum
Et vitam venturi saeculi.
Amen.

Sanctus

Sanctus, Sanctus.
Sanctus Dominus deus Sabaoth.
Pleni sunt caeli, et terra gloria tua.
Hosanna in excelsis.

Agnus Dei

Agnus Dei, qui tollis peccata mundi,
miserere nobis.
Agnus Dei, qui tollis peccata mundi,
miserere nobis.
Agnus Dei, qui tollis peccata mundi,
dona nobis pacem.

キリエ (あわれみの讃歌)

主よ、あわれみたまえ。
キリストよ、あわれみたまえ。
主よ、あわれみたまえ。

クレード (信仰宣言)

われは唯一の天主を信ず。
全能にまします父、天と地と、
見ゆるもの見えざるものすべての創造主を。
また唯一の主イエス・キリストを信ず。
天主のひとり子にして、
全ての世に先立ちて父より生まれ、
天主よりの天主、光よりの光、
まことの天主よりのまことの天主にてまします、
つくられずして、生まれしもの、父と一体にして、
万物はこれによりて作られたり。
人なるわれらのために、またわれらの救いのために、
天より降り、
聖霊によりて、童貞マリアより肉体を受けて、
人となりたまえり。
またわれらのために十字架につけられ、ポンシオ、
ピラトのもとにて苦しみを受け、葬られたまえり。
しかし、聖書に従いて、三日目によみがえりたまひ、
天に昇りて、父の右に座したもう。
生者と死者とを裁かんがため、栄光をおびて再び
来たりたまう。その国は終りなかるべし。
また主にして、生命を与うる
聖霊を信ず。
すなわち父と子より出で、
父と子とともにひとしく認め、尊ばれたまひて、
預言者を通じて語りたまえり。
また一にして聖、公にして
使徒伝来なる教会を信ず。
罪のゆるしのために、
唯一の洗礼を告白し、
死者の復活と後の世の生命とを
待ち望みたてまつる。
アーメン。

サンクトゥス (感謝の讃歌)

聖なるかな、聖なるかな。
聖なるかな、万軍の天主にまします主。
おんみの御栄光 (みさかえ) は天地に満てり。
いと高きところにホザンナ。

アニュス・デイ (平和の讃歌)

世の罪をのぞきたもう天主の子羊、
われらをあわれみたまえ。
世の罪をのぞきたもう天主の子羊、
われらをあわれみたまえ。
世の罪をのぞきたもう天主の子羊、
われらに平安をあたえたまえ。

■「草野心平の詩から」

草野心平作詩

石家荘にて

茫茫の平野くだりて
サガレンの
潮香かぎし女
月蛾の街にはいり来れり
白き夜を
月蛾歌わず
耳環のみふるえたり

ああ
十文字愛憎の底にして
石家荘
沈みゆくなり

天

出臍のような
五センチの富士
海はどこまでもの青ブリキ

あんまりまぶしく却ってくらく
満天に黒と紫との微塵がきしむ
寒波の縞は大日輪をめがけて迫り
シヤシヤシヤシヤ音たてて氷の雲は風に流れる

人間も見えない
鳥も樹木も
出臍のような五センチの富士

金魚

あおみどろのなかで
大流金はしずかにゆらめく
とおい地平の支那火事のように
支那火事が消えるように
深いあおみどろのなかに沈んでゆく

合歓木の花がおちる 水のもの
そのお白粉刷毛に金魚は浮きあがり
口をつける

かすかに動く花
金魚は沈む
輪郭もなく 夢のように
あおみどろのなかの朱いぼかし
金と朱とのぼんぼり

雨

志戸平温泉第五号の番傘に
音をたてる
何千メートルの天の奥から並んでくる雨が
地上すれすれの番傘に音をたてる
林檎畑にはさまれた道に
そうして墜ちて沁みる
點
點
天の音信
霧が生れひろがり空にのぼる

さくら散る

はながちる
はながちる
ちるちるおちるまいおちるおちるまいおちる

光と影がいりまじり
雪よりも
死よりもしずかにまいおちる
まいおちるおちるまいおちる

光と影といりまじり
ガスライト色のちらちら影が
生まれては消え

はながちる
はながちる
東洋の時間のなかで
夢をちらし
夢をおこし

はながちる
はながちる
はながちるちる
ちるちるおちるまいおちるおちるまいおちる

■「白いうた 青いうた」

谷川 雁 作詞

南海譜

南のすな まぶしい影 いくさ果てて さびる錨
よせる波を くだくしずけさ
魚よ 魚よ おなじ骨ぞ
ともにうたえ 鮫のみやこで
あわれ 時の 椰子の高さ

潮がみちて 十日の月 船底から のびる鎖
わかい祖の こえの泡だち
孫よ 孫よ おなじ年ぞ
ともにあそべ 渦のものなかで
あわれ 時の 珊瑚の赤さ

なまずのふろや

なまずこのほど ふろやを はじめた
あおい月でる 波のおとする
蛙の親子 みずかき ごしごし
けさのテストは 5足す3 4掛け2
しくじった めっちゃくちゃ うき世は くらいな
どじょうが 死んだなら 蛍どんになあれ
蛙咳して まいいさ びんとこしょ
金もはらわず けろけろ おやすみ

なまず得意で ひげづら びくびく
とおい山から おめあての客
からすの娘 ぼつかばか しっかりと
髪をなでなで ロシヤが 見たいわ
あら待って すつからかん うき世は つらいな
なまずが 死んだなら 泥亀になあれ
おやじぶるぶる ふるえて けしからん
ぐらりもくもく ふろやは おしまい

二十歳

まぼろしの 噴水に ぬれたひとところ 胸のあたり
うらぶれた 四月の 昼のいしだたみ 影とあるく
小犬よ わらえ 何にもないはたち
パン屋の匂いから 逃げてきたおれを
鳶いろの ひとみは そらの青うつす 風も砂も

うみどりの さげびを かくすのどの奥 シャツのぬくみ
てのひらの 銀貨に リラのかおりする 罪を語る
さかなよ わらえ 何にもないはたち
干がたの舟のように うごかないおれを
鳶いろの ひとみは そらの青うつす 風も砂も

自転車でにげる

やばい しばい オートバイ
ちんけなうそ ばれた
トゥートゥル トゥートゥル トゥートゥル トゥ
とんぼのはね くわえて
すたこらさと にげる
どいつも こいつも ぎぜんしゃ
おれは どっこい じてんしゃ
かんからかんの ちりりりんさ
ちりりりんの あかちょこペーさ
トゥートゥル トゥートゥル トゥ

傘もなく

傘もなく雨 午後の店 雨
つめたい 首すじ
百合を買うのは いまを売ること
この手の くぼみに しずくを ためよう
靴にしむ雨
葉書の 一文字
ながれうかび消えて

傘もなく雨 鳩のむれ 雨
ひとの名 ぬれゆく
霧を買うのは 影を売ること
めがねの くもりを そのまま あるこう
泥と檻樓 雨
この世は ただよう
うすみどりの波に

火の山の子守唄

夜が くばる やさしさの便り
あおい 鐘が 鳴りはじめたら
火の山のふもと ナルコユリ咲く
ささやかな風に 吹かれて ひとりて
月の ひかり 縄ばしごおるる
指を ひらく 影法師よ ねむれ

■「枯れてゆく音」

辻井 喬作詩

内側で枯れてゆくのは
時間だろうか 風景だろうか
落葉を踏んで去っていった人の先の方で
鳥が飛び立つ

枯れてゆく音は
ものが壊れる音でも
大地がひび割れる軋みでもない

もっと静かな
たとえば冬を迎える落葉松の林が
ひかりに包まれて散る夕暮れ
あるいは霜が
ほがらかな朝の囀りに崩れる時の
あるかなぎかの風

すべてが終わったところからはじまる
やさしい物語があるだろうか

戦に征った男達の還りを待つ
編棒の無言の動きのように
くもり空に聳える楠が
いかめしく渉り鳥を受容れる日の
葉のざわめきのような

あるいは船が
羅針盤だけを頼りに
暗夜の 未知の
南への航海に旅立つ時のような
自信に満ちた あてどなさか紡ぐ
ひそやかな昂奮に似た物語が
はたしてあるのだろうか

もし許されているとすれば
それは無言の旅人がふと目にとめる
道端に落ちたピールの栓のきらめき
あるいは 春の野の逃げ水のような
おさなかつた頃の 思い出だろうか

かつて風物詩という言葉が生きていた頃
ひとびとは季節の音を
物売りの声や
遠ざかる風鈴に聞いた
いまはもう 何もないから
内側に耳を傾けて
銀河が寒い空に光り
記憶の風景が枯れてゆく音を聞いているのだ

■「土の歌」

大木 遵夫 作詩

第一楽章 農夫と土

耕して 種子を撒く土
人みないのちの糧を
創り出す土
耕して種子を撒く者
農夫らの楽しみの子
悲しみの種子
ともかくも種子がいのちだ
朝 星を見て 野良に出る
働いて 額に汗して
夕星を見て帰るのだ
種子をはぐくむ土こそは
種子を撒く者の夢だ 望みだ
そして祈りだ

花さき みのる 毎年の
約束の不思議さよ

第二楽章 祖国の土

ああ 大地
踏んでみて
寝ころんでみて
たしかな大地
ああ まして祖国の
土の尊さ

大空の星を仰いで
高く仰いで 歩け 歩け
しかし 溝には はまるまい

山河よ
さくらの 菊の
花咲く丘よ
顔あげて
堂々と 踏みしめて
この土を 踏みしめて
この土を 護ろうよ
祖国の土を

第三楽章 死の灰

世界は絶えて滅ぶかと
生きとし生けるもの皆の
悲しみの極まるどころ
死の灰の怖れはつづく

文明の不安よ
科学の恥辱よ
人知の愚かさよ

ヒロシマの また長崎の
地の下に泣く
いけにえの霊を偲べば
日月は雲におおわれ
心は冥府の路をさまよう

第四楽章 もぐらもち

もぐら もぐら
土にもぐって
日のめも見ない
もぐら もぐら
それでもおまえは
しあわせだとさ
もぐら もぐら

地の下の
穴の暮らしが
やすらかだとさ
もぐら もぐら

火の槍におびえる者は
死の灰をおそれる者は
もぐらの真似をするような

なるほどな
土から出てきて
土にと帰る
もぐら もぐら
どのみち
それが人間か
わっはっは
わっはっは
もぐら もぐら
笑ってやれよ
人間を
もぐら もぐら

第五楽章 天地の怒り

雷だ
いなづまだ
嵐だ 雨だ
洪水だ

土手が崩れる
崖が砕ける
橋が流れる
樹も垣も
根こそぎにされる
濁流が
家を呑む
人をさらう

地の上に山脈があり 地の上に重みがある
地の下に燃える火があり 地の下に怒りがある
地の上に絶えずかぶさる人間悪よ
地の上のなげきは深い 長い年月

火の山の
爆発だ
地震だ
火事だ

溶岩が流れる
尾根が崩れる
落ちる
なだれる

火の海だ
修羅の巷だ
逃げまどう人の
すさまじい叫び
うめき
のけぞる
ころがる
煙突が倒れる
時計台が崩れる
荒れ狂う町

第六楽章 地上の祈り

美しい 山河を見て
美しい 花を見て
大地の意を信じよう
恩寵を
自然に享けて感謝しよう

ああ
戦争の
狂気をば
鎮めたまえ
剣の乱れ
爆弾の恐れを
さけたまえ
天意にそむく
動乱を
おさめたまえ
ああ 戦争の
狂気をば
鎮めたまえ

地の上に花咲く限り
よろこんで日ごと営み
悲しみも耐えて生きよう
ああ 栄光よ
ああ 地の上に平和あれ

第七楽章 大地讃頌

母なる大地のふところ
われら人の子の喜びはある
大地を愛せよ
大地に生きる人の子ら
その立つ土に感謝せよ
平和な大地を
静かな大地を
大地をほめよ たたえよ土を
恩寵の豊かな大地
われら人の子の
大地をほめよ
たたえよ土を
母なる大地を
たたえよ ほめよ
たたえよ 土を
母なる大地を ああ
たたえよ大地を ああ